

# 宗 教 心 の 展 開

— 願 生 と 淨 土 —

安 田 理 深

宗教心というものは、やはり人間に深い関わりをもつたものです。まあ人間に関わりをもたぬものはないといってもよいけれども、しかし、宗教心は人間というものに根源的な関わりを持ったものである。人間が人間を考えるよりも、もっと深い関係というものが宗教心において考えられる。宗教心というものをそういうように見る。

まあ私の言葉でいえば人間を実存として成就する。そういう意味が宗教心にある。存在を失っている人間をして存在へ返す。そこに人間としての意味を見出す。そういう具合に宗教心というものを考えることができる。それで、宗教心というものは一般的には菩提心という言葉で表わされている。大乘において宗教心というなら菩提心である。まあ解脱心ということもあるが、解脱といえは涅槃と菩提ということですね。宗教心というものは涅槃

を得しめるものだから、あるいは菩提を成就せしめるものだから、菩提とか涅槃とかいわれる。まあ菩提の内容が涅槃である。涅槃をさとするような心が菩提である。無上菩提心とか、無上涅槃とかあるいは、大菩提とか大涅槃とか無上とか大という字で表わされている。無上とか大とか、という字が大乗を表わしている。小乗の場合でも涅槃が考えられるわけですが、菩提にも三乗の菩提ということがあるわけですから、その意味で無上菩提によって大乘の宗教心が表わされている。まあ衆生に菩提心が起るならその衆生を菩薩という、こういうわけです。菩薩が菩提心を起こすのではない、衆生に菩提心が起きた場合、起きた菩提心が衆生を菩薩に位づける。菩薩というのが大乘の実存です。凡夫というのは実存を失っている。実存性を失った実存です。菩薩というのは、実存

を回復したところの実存です。それが究竟すれば仏とい

うことになるでしょうね。菩薩は仏を求める。菩提を求め

めるのが菩薩である。菩提心を起すことは、菩提

提へ方向をもった心が衆生に起きるとい意味でしょう。

菩提への方向です。菩提への方向をもった心が衆生に起

きる。起こった場合に衆生は菩薩と呼ばれる。菩提心が

成就したのが菩提です。菩提心が菩提となる。菩提とい

うものが成就すれば、その菩薩は仏と云われるわけです。

「願生心」というのが毎年続けている講義の題目です

が、願生心というのは『無量寿経』と、それに由来する

『浄土論』、経からいえば『無量寿経』、論からいえば『浄

土論』、そういうものでは宗教心が、願生心、願生の信

心といわれている。『浄土論』には一心という言葉がある。

「世尊我一心、帰命尽十方無碍光如来、願生安樂国」と、

こういう具合に一心といふことの内容を帰命といふ

帰命といふことの内容を願生とこういってある。帰命とい

うのも願生というのも一心を表わした言葉ですね。だ

からまあ願生の一心とこういってもよい。一般には信心

です。『無量寿経』では一念の信心という。宗教心とい

うものは一般には信心という言葉で表わされている。だ

から願生の信心もやはり菩提心という意義をもっている

わけでしょう。

これは親鸞の『教行信証』の「信巻」に、天親菩薩の

一心というものと、本願の三心というものについての問

答が出ています。そういうことも大きな問題ですが、一

心というものが一心を成就する契機を一心の中にもって

いる。そういうものが三心です。一心というものが、三

心という構造をもっている。あゝという問答を通して、親

鸞は「信巻」の末巻に三心一心の問答の帰結として、信

心というものが無上菩提心であるということ語ってい

る。信心すなわち菩提心である。そこには菩提への心と

云いうものがある。あるいは菩提に属するところです。

あるいは菩提心という言葉で別の言葉でいえば仏心ある

いは如来心といってもよい。信心はすなわち仏心である。

仏心であるが故に仏になることをそれ自身に自証

しているというわけです。「信巻」の末巻には、三心成

就の一心としてその一心が菩提心であるということを通

らかにしているのですが、そこに『論註』を通して『観

無量寿経』の「是心作仏、是心是仏」という经文があり

ます。是の心、仏と作る、是の心、是れ仏である。あゝ

いう所に『観無量寿経』というものは、――。

御承知のように大小の『無量寿経』の他に『観無量寿

『無量壽經』の本願というものができていますが、『無量壽經』の本願というものに目覚めないものに、『無量壽經』の本願というものを聞く。こういうような位置を『観經』に見出しているのが、善導の觀經解釈でしょうね。だから『観經』には誘引というような、本願の外にあるものを本願に導びくというような性格があるわけです。だから是心作仏は心是仏とか、あるいは無生法忍ということもある。韋提希夫人が無生法忍をえた、あゝいうようなことは、『大無量壽經』に立っていえば、信樂ということでしょうが、それを無生法忍とか是心作仏は心是仏というような表現で表わしてある所に、誘引という意味がある。『観無量壽經』には、信心という言葉がない。信心という言葉がないのが『観經』の一つの特色です。是心作仏は心是仏というようなことは、まあ聖道門ということになるのですけれども、『安樂集』によって見ると、聖道の立場にある衆生を誘引して『無量壽經』の本願というものを開く為である。『法華經』には「方便」ということがある。方便とか真実ということが、一番はっきり出ているのが『法華經』ですが『法華經』には御承知のように「三乗を会して、一乗を聞く」というテーマがありますが、丁度『観無量壽經』はそういうような意味をもっている

と思います。一乗は『無量壽經』の本願というものである。聖道は三乗である。そういうような大きな意義、釈迦牟尼仏一代の法門を廻転して、その上に本願というものを開く。そういう大きな事業を『観無量壽經』の上に見出したのが善導の『観經疏』というものでしょう。本願をそのまま本願として語れば必ず誤解される。聖道とは何かというと、人間の能力に対して信頼をもっておる立場ですね。自己信頼、まあ今日という理想主義的仏教、これを聖道という。人間が自分の能力に確信をもっておる所に、主觀的確信という所に、聖道というものが成り立っている。人間が人間の能力に自信をもっている場合には、宗教心というものは隠れているものです。だから自信をもった人間に本願を語れば、必ず誤解される。そうかといって語らなければ通路はない。語れば誤解され語らなければ通路はない。一つのアポリアというものがある。沈黙すれば通路はなくなる、そうかといって語れば誤解される。こういうアポリア、難関を解くところに方便ということがあるわけです。方便誘引ということはそういうことです。だから人間が自分に確信をもってあるわけだから、確信をもって立っている立場に一応本願が自己疎外して、本願が本願の立場を否定して、主觀的確信

の立場に自分を置くわけです。つまり如来が衆生となる。如来が如来自身の立場を否定して、衆生の立場をとる。

それによって、衆生の立場を廻転して如来の立場に移す。

「如意」という言葉を善導が解釈している。親鸞がその解釈を取り上げています。「意の如く」するという場合、始めは衆生の意の如くする、衆生の意に随う。それから弥陀の意の如くする、如来の意に随う。こういう二つの意味を含蓄している。如来が如来自身を否定して衆生の意に随う。それを通して今度は衆生を如来の意に随わしめる。如来が衆生となって、衆生を如来の意に転じる。こういう所に如意がある。これが如意である。こういうのが『観無量寿経』の論理であろう。

衆生を誘引するとか教化するということは広い意味の教育ということですが。教育というものはどうして成り立つか。教育の原理というものはやはり、この如意ということによって表わされるのではないかと思う。そうしてみますと、願作仏心とか度衆生心というのが聖道の、理想主義的仏教の、いわば一般大乘仏教の信仰の要求するものを最も具体的に表わしたものでないか。願作仏心とか是心作仏是心は仏という言葉が、全く菩提心そのものを表わした言葉だろうと思います。云って見れば、理想主

義的仏教からいえば、全身をかけて求めていっているものがそこに表わされている。聖道仏教の求めてやまぬ内容が、そこに表わされている。それだから誘引という意義をもつてくるのでしょうか。つまり、聖道が求めるけれども、求めるが如く成就しない、成就しないけれども求めざるをえない。菩提を求めて、菩提は成就しない。成就しないけれども、菩提を求めずにはおれない。求めてえられぬ、こういう形が願作仏心という所に出ておるですね。だから聖道を誘引し否定するといっても、たゞやめてしまふ、聖道を否定して凡夫になるというわけではないでしょう。『無量寿経』の教学は、聖道を否定して凡夫道になるという意味ではないと思います。やはり、聖道の求めて得られなかったものを、求めずしてそこに成就する。求めて得られなかったものを求めずしてそこに成就する。こういうようなやはり聖道に答えるという意味がある。聖道では聖道が成就しない。成就しないということとはやめてしまふということではない。求めて得られないものを諦めてしまふ、出来ないから諦めるという。しかし諦められるものなら宗教心というものではないですね。諦められぬものを願というんです。無上菩提の願というのです。また諦められぬものを本能という言葉で表

わたしたのでしょう。宗教的本能です。できなきや止めとこうというものなら本能じゃない。ある意味からいうと菩提というものは人間の能力を全く越えたものでしょう。菩提を包むような人間の世界はない。そういうのが無上という意味であり、大といわれる意味です。菩提というものを包むような世界、あるいは世間はない。むしろ人間が菩提を包むならば人間自身が否定される。人間のまゝで包むわけにはいかない。もし人間が菩提に関係するならば、人間自身の肩が碎ける。しかしそれを諦めるわけにはいかぬ。

だからそこには方向転換というものがあるだろうと思う。菩提を求めている方向を転じて、何か根元へ、――人間が仏を求めているけれども求められるものとしての仏を転ずる。仏というものを人間の向うにおく立場を、理想主義という。仏を理想とするわけです。そうでなくて、仏というものは却って現実の中にある。人間の方が現実だと思ふけれども仏は理想でしょうけれども、しかし人間の現実よりも、もっと本當の現実です。人間の現実といわれているものよりも、もっと深い現実、そういう所に仏を見出しにくる。人間の向うに、理想として仏

を求めた方向が却って、人間の根底に仏というものを見出しにくる。大きな方向転換ですね。根元に帰れば、帰った人間の上に根元の宗教心というものが、いわゆる無上菩提心として成就する。こういう意味がある。宗教心というものは、人間に現われる。仏心が人間に名告る。そして人間を仏に転ずる。こういうような意味をもつのが信心です。『観無量寿経』には信心という言葉がない。是心作仏是心是仏という。これは聖道仏教においては垂涎三尺というような、よだれの出るような言葉なのでしょう。そういうものでなければ方便にはならない。方便ということが分っていたら方便にはならない。これは方便だと分って方便をやるものはおらん。求めて得られないけれども、諦めることができないもの、こういうような深い要求。要求といっても、願という言葉で表わされている。これは今日、広い言葉でいえば関心、人間の根本的関心を表わすことばでしょう。仏を求めるといふことは、冷静に考えることではないですね。仏を求めるといふことは、そういうものがあつた方がよいというような、冷静に考えるものではない。人間というものが、宗教というものを持つということ、宗教問題をもつということとは、参考になるとか、あつた方が得だとかいうこと

ではない。それによって人間は人間となることができる。こういうような、全存在を滲透するような関心、そういうものを垂涎三尺といっている。是心作仏是心是仏、それが菩提心ということをも具体的に表わした言葉です。それを、念仏が信心として廻向する。『無量寿経』に來れば、こういうような形になる。そういう所から初めて、信心が仏心である、是心是仏です。信心が仏であるが故に、信心が仏となる。仏でない心が仏となるのなら証明が必要です。仏でない心が仏になるということになると、どうして出来るかという証明が要る。だけど信心というものは、それ自身、本質として仏に属する心です。菩提に属する心です。だからそれ自身において菩提となる。菩提心が菩提となる。菩提でない心が菩提となるのではない。・・・A is A.』というふうなものです。AがBとなるのではない。つまり信心が完成することなのです。この信心が菩提心という意義をもっている。

菩提という言葉を涅槃にかえても、大菩提を大涅槃にかえても同じことです。大菩提の内容が大涅槃です。菩提というものが、初めて人間をして人間から解脱せしめる。解脱、涅槃というものを開く。

天親菩薩の一心と、本願の三心というものについて親

鸞が問答を起こして、何故、本願には三心といっているものを天親菩薩は一心といわれたか。そういう問答が始めに出ていますね。問答の入口です。その時に親鸞が答えている。それは愚鈍の衆生をして了解し易からしめんが為であると。愚鈍の衆生をして了解することができるようにする為であると。それからもう一つ、続いて本願には三心といっているが結局は涅槃の真因は唯信心なるが故に——。「涅槃真因唯以信心是故」という。涅槃真因は唯信心というのは、『涅槃経』からいいます。信心は唯信心であると。これを『華嚴経』からいえば菩提の真因は唯信心となる。菩提はこれ道である。因はこれ元である。道元である。道元禪師という方があってしょう。こういうことは、『華嚴経』にある言葉です。これを親鸞が「信巻」に引いている。信心は道元であると。道の元である。涅槃の真因といってもよいし、菩提の真因といってもよい。『涅槃経』からいえば涅槃の真因、『華嚴経』からいえば菩提の真因である。

そこに故という字がある。涅槃の真因は唯信心なるが故に一心というのだと。故という字がついている。だから信心が涅槃を得るとか、信心が菩提を成ずるといふことは、結論ではない。信心が涅槃の因だということは結

論ではない。結論ではなしに「故」というのだからむしろ理由でしょう。判断の理由でしょう。結論ではない。

「涅槃の真因は信心なり」ではなしに、「信心を以てす、この故に」。これは理由句でしょう。だからこれは今いいましたように信心が成仏するということは、成仏は信心のほかにないということは理由になるのであって結論じゃない。つまり、別の言葉でいえば、涅槃は証する。菩提を証する。涅槃とか菩提は証である。証の因は信だという。順序として教・行・信・証といつてある。しかし信と証とは二つのものではない。信を得てまた別に証をえるということはない。そんなら理由がなければならぬ。何故そういうことができるか。如何にしてそういうことが可能かという理由が要る。これはそうではない。同時のものだ、だから充分である。これは菩提心が菩提となる。信心は菩提心であるが故に菩提ということをそれ自身の上に自証している。菩提でない心、凡夫心が仏になるのなら証明がいるでしょう。けれど仏心が仏になることは仏心自身が自証しておる。こういうことが大事なことですね。証というものは、信仰、信心の信念だと、この信念を表わす言葉を正定聚という。現生正定聚というのは信念を表わす言葉、確信を表わす言葉でしょう。信

は現在である。

信と証とは同じだといっても、無論、位は違うんです。位は違うからして信は現在、証は未来という。しかしながら、信というものを得るならば、現在の外に未来があるのじゃない。現在の中に、未来は確信として、入っている。現在の中に、未来が入って来る、これを当来という。信仰というものは未来を転じて当来となす。信仰というものは未来を転じて当来となす意義をもつ。当来といたった場合はもう現在の中にあるでしょう。当来というのは、まさにきたるべきものとしての現在の確信です。未来に未来の確信があるのじゃない。それなら意味ないことです。未来は必至滅度です。至るということになれば未来に至る。しかし必まで未来であったら意味がない。至るのは未来だけれども必は現在である。必然という。未来というものはないんだということをいうわけじゃない。未来というも現在中の未来、即ち当来であるということです。

信心は菩提心であるから、菩提になる。であるは *sein* になるは *Werden*。信心は仏心である。であるが故に仏になることをそのうちに自証しておる。こういうのを自

証というのでしょうか。これは親鸞が非常に深い注意をしているのですが、『無量寿経』に「重誓偈」というのがあるでしょう。これは法蔵菩薩が四十八願を述べた後に再び要約して重ねて誓ってある。そこに四十八願を三つの誓にまとめて表明してある。その一番はじめは、必至滅度のことにふれている。「我建超世願、必至無上道」とある。私はいま超世の願というものを建立した。その超世の願をもって必ず無上道に至らんといつてある。四十八願を以て成仏したい。だからして不取正覚ということが四十八願に繰り返してある。正覚を取らじと。正覚を取らじというのとはこれが出来んならやめだということではない。そんな頼りないことではない。これができんならやめだあとというような意味じゃない。四十八願というのが、自分は仏を求めるのであるが、四十八願の成就するような仏でありたい。それ以外に仏ということがあっても、それは私の四十八願をもって願う仏ではない。四十八願をもって成就するような仏でありたい。それ以外の仏はあえて欲しない。こういうことが表明されている。『教行信証』ではここで異訳『如来会』が引いてある。「当証無上菩提因」。まさに無上菩提の因を証すべしと、この言葉が引いてある。これは一寸おかしいでしょう。

無上道、この道は菩提ということで、道は果である。願は本願でこれは因。四十八願を因として無上菩提の果を成就しようというのが必至無上道である。ところが異訳の方は、無上菩提の因となっている。こういう所に何か深いものを見て親鸞は異訳の經典に注意している。無上菩提の果を証すべしというなら正依と同じことです。ところが無上菩提の因を証すべしと、大いに違っているでしょう。だからこの無上菩提の因は願あるいは信でしよう。無上菩提の真因は信でしょう。だから証ということになると、普通なら果を証するという。無上菩提を証する。涅槃を証する。だから因を証するということになる。涅槃を証する。だから因を証するということになると、証という意味が違う。親鸞はこれに字訓をつけて、験証という意味であるとしている。果を証するなら覚証というような意味になるでしょう。験証といつてあるのは面白いです。教行信証という時の証は果を証する。そういうように普通には果を証する。しかしこの場合には無上菩提の因を証する。因を証するのだからこの証は験証。験という字は体験あるいは経験です。まあ経験という言葉より体験の方がよい。体験あるいは実験といつてもよい。無上菩提の因を実験した。信心を体験した。信心体験ということ、信心というものを獲得したということ

とです。信心をうるといふのは体験することです。これはまあ面倒な話ですが、如来を体験するということはいえない。如来は体験を超えたものです。果を証するといふが、果は体験を超えている。果というものをなお体験として考えるなら自証唯心となる。人間のさとりです。本当の浄土の真実というものは、体験を超えておる。だから涅槃を体験するというよりも、涅槃に帰するというべきである。涅槃というものの中へ解消してしまう、帰るのである。だから涅槃そのものは体験を超えており涅槃を体験するということはいえない。けれども涅槃をさとするような智慧を体験する。涅槃をさとするような智慧が信心である。信心は体験するものである。信心は獲得するといえる。如来を獲得するということはない。如そのものは獲得できない。如が来る。来るのは体験として来る。如が来る。如そのものは体験を超えている。しかし如が来るのは体験としてでしょう。如というものは得るものではなく会うものである。如は会うものである。信心の場合だとよく分らないが、煩惱の場合だとよく分る。煩惱は獲得する。金というものは獲得せぬものです。金を得るといふことはできない。金というものを得るといふことはありはせぬ。金というものは経済の法則

によって動いている。得るも得ぬも超えているのが経済法則である。あいつは真面目なやつだから一つ止ってやれとか、真面目に働いておるから金持にしてやれとか、あいつは生意気だから貧乏にしてやれとか、そんな意思はない。経済法則には、愛着心はない。たゞある人間の懐から、ある人間の懐に移動しているのは経済の法則に従っているのである。そして来た場合を喜び、去った場合を悲しむのは人間にあることである。経済法則にはありはしない。得て喜び失って悲しむのは人間にあることである。煩惱にあることである。喜んだり悲しんだりする心を人間は得ておる。金を得たのではない。金に出会う。経済という状況 *situation* に人間は出会う。出会うというところ出会った人間の経験の上に、得たとか失ったとかいうことが成り立って来る。この区別はもっと云わなければならぬが大事なことである。こうして見ると面白いことでしょう。

四十八願というものは、つまり法蔵菩薩の信仰告白です。法蔵菩薩が願を起して、我々はそれによって願を得るといふのじゃない。四十八願そのものが法蔵菩薩の信仰です。四十八願は法蔵菩薩の「我が信念」である。そういう所から考えて、四十八願は法蔵菩薩が起したと

いうようなものでもないでしょう。法蔵が出会ったの  
でしよう。如来の願に出会った。法蔵の願という言葉は  
親鸞の言葉の中にはないですね。如来の願です。逆に法  
蔵の正覚という言葉を使ってある。阿弥陀仏の正覚と云  
わずに法蔵の正覚という。阿弥陀仏の願、法蔵の正覚と  
逆になっておる。普通では法蔵の本願、阿弥陀仏の正覚  
というけれども、法蔵の正覚、阿弥陀の本願とあってあ  
る。法蔵菩薩に起こっても如来の本願である。法蔵菩薩  
が如来の本願というものにふれて――。こういうのを感  
得というのではないか。如来の本願を感得したのではな  
いか。四十八願として感得した。感得したということが  
本当の意味の建立なのでしょう。いわゆる我々が努力し  
て作ったのは建立じゃない。本当に感得したものが本当  
の建立である。主観で作りあげたようなものは本当の建  
立ではない。やはり主観を超えて感得した。こういう意  
味があるのではないか。だから四十八願というものの感  
得というものにおいて、四十八願という内容をもった信  
仰を表白してある。こういうのが「重誓偈」である。

いずれにしても、信心というものは菩提心をもったも  
のである。菩提心というものが先にいったように本来仏

である心である。だから信心は菩提心という意義をもつ  
が故に、菩提心という字には発という字がつきものであ  
る。発起という。起はこれ生起、あるいはこれを縁起す  
るといってもよい。諸法縁起である。同時にまた発起す  
るとこういうように二重の意味がある。縁によって起こ  
る、縁起すると共に同時に発起する。縁起するという意  
味では煩惱が起こるようにまた信心も起こる。どちらも  
経験されることです。同じように煩惱も縁によって起こ  
るし、信心も縁によって起こる。

縁というものの最高のものを聞という。教えられると  
いうこと、教育の縁を通して教えられるということが起  
こる。これは非常に大事な言葉である。信仰心というも  
のは人間の個人を探してもないし、また大衆を探しても  
ない。マスコミの大衆を探してもその中から信心は出て  
来はしない。教団を探しても出て来ないし神学を探して  
もでてこない。何を探しても出て来ない。信仰というも  
のの起源を自己の主観の中に探して見た所で出て来るも  
のじゃない。自分の主観を破って大衆の意識にこれを求  
めるといっても、これもない。自己の意識に求めてもな  
い。大衆の意識にこれを求めてもない。学問の中にこれ  
を求めてもない。

そういう所に教というものがある。信というものを得た人の言葉だけが信の縁になる。信を得た人の言葉だけが信の縁になる。教師という意味は、偉い人という意味ではない。良き教師、つまり善知識です。良き教師というのは勝れた人という意味でもない。目覚めた人である。目覚めた人の言葉だけが迷うものに対する縁になる。偉いといつて見てもどこで偉いか偉くないかを決めるかといえは、偉いとか偉くないとかいうことは人間の理性的価値である。理性が決める。真とか善とか美とかいうのは理性的価値である。無論経済的価値ではない。経済的価値は価格という言葉で表わされる。真理というものは交換価値ではない。理性的価値ですね。そういうものは理性が決めたものです。理性が決めたものは理性の教師になる。けれども理性は我ではない。理性をもつものが我である。我を見出すような教師というものは、理性の価値標準から決めるわけにはいかない。理性的に勝れた人の言葉が宗教的に教えるということはない。理性的に劣った人であっても、宗教的に教えられる場合は幾らでもある。理に適うということは別にさとりという意味ではない。合理的ということは、別にさੱつたという意味ではない。だから教えというものが縁になる。教えによ

って縁起される。

しかしながら一面からいえばそうですが、縁起という場合は人間の経験されるものが、みな縁起である。煩惱も体験されるし、信心も体験される。信仰も一つの体験である。だけれどもあらゆる体験と信仰体験と、どこが違うのかというなら、信仰は体験の中の一つであるけれども体験を超えるような通路となるような体験である。信仰も一つの人間体験だけれども、しかしそれは人間を超えるような意味をもった体験である。それでたゞ縁起という意味をもつだけでなしに、縁起であると同時に発起する、とこういう。

やはり宗教心というものは人間の中に人間を破って起る。しかし好きで起るということはない。宗教は好きなものじゃなかろう。好きといわれるものは何でも価値である。理性価値であろうが交換価値であろうが、好きなもの、欲しいもの、願わしいもの、みな価値です。ところが信仰は好きなものじゃない。人間は信仰を求めない。人間の意識は、信仰を求めない。人間の信仰は意識以前の本能が求めているのであって、意識は却って嫌っているものです。迷った意識が真理に近づくと、好きで近づくとではない。恐れながら近づくと。恐れおの

きではないか。おそれるものなら避けたらよさそうなものなのにもかも知れぬが、恐れながらも近づかざるを得ない。こういうのが本能です。恐れるものなら中止したらよさそうなものを、恐れながら近づかざるを得ない。つまり信心は、菩提心という意義をもっておるのだから発起せねばならぬ。だから信心が縁起されたものという限り人間に起るのですが、人間を超えたものが人間に起る。人間を超えたものは如来といってもよいが、人間に起るから信心という。信心というのは人間に起ること、ということがなければ、信心という必要がない。

禅のさとりはさとつたら人間を超えます。さとりを開いたら凡夫ではない。凡夫ならさとりは開けぬ。こういうのがさとりというものです。それだからあゝいう分らんことをいうのと違うかな。問答になるかならぬか分らんような、大風に巻込むような、逆説だね。逆説をいう禅の和尚はひとをびっくりさせるがあゝいう逆説をいうのは、つまりさとれば凡夫じゃない。凡夫ならさとれぬ。こういうのです。そこにどうしても無理があるのじゃないか。さとした人間が迷った人間の中に出て貰っては困る。矛盾が起るでしょう。そういうのは大きな偽善じゃないか。

信心はそういうものじゃない。証と同じものです。如来の心だから如を証している。証といっても、さとりが人間という位にあるからして信という。人間の位にあるけれども、しかし本質はさとりである。人間を超えたとりである。人間を超えているけれども、人間の位に成り立っておる。それで信という。信そのものは全く凡夫をこえておる。凡夫を超えたさとりなのだ。けどそれは凡夫の中にある。さとりは凡夫と矛盾するけど信は矛盾せん。怒り腹立ちという心が起ることと信心とは矛盾せんじゃないか。怒り腹立ちが起っても、それを恐れんのが信心である。矛盾するのは怒り腹立ちを恐れるからです。煩惱が起こつても煩惱を恐れぬ。それが信心です。信心というのは凡夫に起るけれども、凡夫と矛盾しない。さとりは矛盾するんじゃないか。さとりという本質をもっているけれども――。だから如来からいえば信じたのと、さとったのとは一つです。信じた時にすでに仏になったのです。信の一念に成仏したんです。我々からいうから信は現在、さとりは当来となる。人間の側からいうからである。信心そのものからいえば信を得た時、さとりは成就したのである。

(本稿は、昭和四十二年九月十三日、大谷大学における講義の筆録である。文責 本多弘之)